

餓えた時代もあったのに

中国製の冷凍ギョーザ事件から、急にみんなの眼が食べ物に注がれるようになった。中国産はみんな駄目、国産ならば何でも好し、というのは単純過ぎるけれど、食料の国内自給率を高めなければという考え方にノーという人はいないだろう。今、日本国内で生産し百パーセント自給できるのは米くらいだろうか。ほかは穀類にしろ野菜にしろ、海産物や肉類にしろ、大部分が輸入に頼っているのは誰もが知っている。

でも、いつからこんなになったのだろうか。鎖国の江戸時代は当然自給。明治、大正、昭和も戦争中までは自給だった。食料が極端に不足したのは、長い日本の歴史の中で考えてみても、近々六十年ちょっと前くらいからに過ぎない。太平洋戦争で若者は戦場に征き、女性も多く軍需工場で働き、しわ寄せが農業に集った頃からだ。米、野菜、魚や肉などばかりでなく、味噌、醤油や塩までも無くなり、配給制度が出来はしたが、実は満足な量の配給なぞ全くなかった。

戦争中の大通公園を撮った写真を見た事があるだろうか、そこでは主婦や小中学生がクワを振って畝を耕している様子が写っている。大通公園は全体がトキビやジャガイモやカボチャの畝になっていたのだった。

公園ばかりではなく、道路も畝になった。かつての札幌は、駅前通りなどを除けばほとんどの道は砂利道だった。しかも車は乗り合いバスがたまに走るくらいで、徒歩が普通の交通手段だ。だから、生活道路の道幅は、人がすれ違えるか、せいぜい馬車が一台通ればそれで十分。そこで道に面した家々では、道路の真中だけを残して土をおこし、野菜畝にしてしまった。学校のグラウンドもそうだ。

外国から食料が入り始めたのは戦後間もなくのこと。飢えを見かねたアメリカが食べ物を贈ってくれたのが最初と聞いていだろう。学校給食のスタートの脱脂粉乳もそうだし、アメリカ軍常備のカンヅメの残りもあった。

大通公園が芝生に戻ったのは、戦後から数年過ぎた頃。でも市民が食べ物を容易に手に入れる事ができるには、昭和三十年代までは待たねばならなかった。でもそれは自給ではなく、多くは輸入だったわけだ。今自給率は四十パーセント足らず。戦中戦後の苦い思いも自給努力にはつながらなかった。